2DB
二次元ドリーム文庫
Cool Masochist
クーマゾ♪
しつけてお姉ちゃん
栗栖ティナ
挿絵 澤野明
アイ家専用
試し読み版

プロローグ　お姉ちゃんは最強剣士　006
一章　姉弟の隠された資質　022
二章　姉弟の主従関係　075
三章　溺れていく姉弟　124
四章　求め合う姉弟　177
エピローグ　お姉ちゃんは愛しいマゾ妻　230

登場人物紹介

内藤（ないとう） 薫（かおる）

聖哉の姉。クールな美少女剣士。剣道の腕は超一流で、道場では敵なし。涼やかな美しさに、桐生学園内では男女問わず人気が高い。しかし、他人には言えない大きな秘密を抱えている。

内藤（ないとう） 聖哉（せいや）

本作の主人公。薫の弟。古くから続く剣道場の跡取り息子で、姉大好きの自他ともに認めるシスコン。跡取りでありながら弱い自分を恥じて、薫に対してあまり積極的にはなれないでいる。

なにかを訴えるように首を小さく横に振り、先ほど対峙していたときの勇ましさが嘘のように弱々しく、儚い表情になる。

美姉の初めて見るそんな姿に驚く聖哉だが、それ以上に――。

（なんだよ、このゾクゾクする感じ……やばい、俺……）

そんな薫を見て、聖哉は気が遠のくほどの強烈な興奮を覚えていた。

身体が芯から震えるような独特の快感。顔が自然とにやけ、いつになく冷たい表情で美姉を見下ろしてしまう。

「せ、聖哉……私は……んっ、ああ、その目……あのときと同じだ。私が初めてお前に負けたとき……その目に見据えられて、私は……っ……」

薫は怯えと歓喜が入り混じった表情で肩を震わせ、吸い寄せられるかのごとく聖哉の顔を真っ直ぐに見つめていた。

凜々しい強さが浮かんでいたつぶらな瞳が弱々しく潤み、その奥に心の奥の許されざる情欲が煽られて仕方がない、不思議な光が浮かんで見える。

（なんだか、これ……さっき見た雑誌に載ってたような……）

力なくへたり込む女を見下ろし、強引な奉仕を命じる調教師の男。

ついつい見入ってしまっていたSM雑誌の一ページに、ちょうど似たものがあったことを思い出すと、背筋を走る寒気と昂りがさらに高まってきた。

（あの薫姉が、俺の前に跪いて……こんな顔してる。弱々しくて、いやらしい……責めて欲しいって言わんばかりのさ。ははっ……どうなってるんだ、これ）

幼いころ、初めて姉を倒したときに感じた正体不明の劣情。それは間違いなくこれだったのだと、聖哉は確信した。

強い存在である姉を屈服させ、支配する。禁忌の中の禁忌と言ってもいい劣情を、自分はいつも心の隅に隠し持っていたのだ。

（まずいだろう、こんな。でも……）

今日、留学の話を切り出すまではいつも自分の側にいて、見守ってくれていた美姉。

そんな大切な人を無理矢理支配するなど、決して許されない。

世間の目やモラルなどではなく、自分自身がだ。

だが――。

「聖哉っ、はぁんっ……ますます大きくなってきている。それに熱い……人の身体に、ここまで熱くなる部分があるなんて……はぅっ、くは……臭いも濃くぅ……♪」

ペニスを優しく擦りながら、溢れるカウパー腺液の臭いにうっとりと酔いしれる薫は、どう見ても少年の劣情を煽ろうとしている。

――支配されたがっているとしか見えない。

そう気づいた少年は、長年くすぶり続け、無理に押し殺してきていた衝動に飲み込まれ

てしまい、止めることはできなかった。
「薫姉が、そんないやらしい顔するからだろう？　と言うか、弟の袴とトランクスを無理矢理脱がして、自分からそれ……チンポ掴んでくるって、どういうことだよ」
「そ、それは……そのっ……」
「言い訳はいらないよ。どういうつもりだって聞いてるんだ。負けた後、俺がなにも言っていないのにいきなり……おかしいだろう？　どういうつもりなのか、ちゃんと説明してくれよ。それとも……口にできないようなことをしてるって、自覚あるのかよ？」
「あぁ……せ、聖哉。私は……くぅっ、あぁっ……」
聖哉が心の底からこみ上げてくる劣情の赴くまま責めると、薫は肩を震わせながら動きを止め、ただじっと見つめてきた。
潤む瞳にははっきりと悦びの色が見え、先走り汁で濡れた亀頭に吹きかかる吐息の荒さが、なじられることで美姉が昂っているのだと教えてくれた。
「なんだよ、それ。こんな風に言われて、なんでそんなエロい顔してるんだよ、薫姉。ほら……チンポ、興味あるならもっと側で見てみろよ。ほらっ！」
背筋がゾクゾク震える昂りを止められず、腰を思い切り突き出す。
「ひぃっ、くぅっ、むぐっ、はぁ、ふぁんんっ！」
薫がなにか言い返そうと開きかけた桜色の唇に、亀頭が滑り込む。

美姉は驚きの声を隙間から漏らしながら、舌先を肉竿の先端に押しつけて追い出そうとしてきた。

「吐き出すなよ。臭いでうっとりしてたくせに……嫌じゃないだろう！」

火のついた聖哉は自分を止められず、舌を押し返すように腰に力を込める。

熱い唾液塗（まみ）れの舌面で竿肌をねっとり舐め上げられるような形で、怒張は中ほどまで美姉の口内に入り込んだ。

「むぐっ、んぷぅっ、ふぁあっ、せぇ、聖哉……んちゅっ、こんな……聖哉のっ……ものが、私の口にぃ……ひふっ、ふぁっ、ひぅっ、んちゅううっ♪」

薫はもう口の中の異物を追い出そうと抵抗することなく、ためらいがちな動きながらも肉幹に舌を這わせ始めた。

美姉の手で扱かれ続け、はち切れんばかりにふくらんだ竿肌が、舌先でくすぐられるように舐められる。

手のひらと違う濡れた感触は、表皮が溶けていくような恍惚の快感を与えてくれた。

「くぅっ、なんだよ、随分と熱心じゃないか。無理矢理口に突っ込まれたチンポ、美味しそうに舐めてさ。どういうつもりだよ、本当に」

「はぁはぁっ、せ、聖哉が……んちゅっ、はぁ、突っ込んでくるからだ。だから、私は、これ……んふぅっ、じゅるるっ、ちゅぅっ、れろぉっ……」

「舐めろなんて、俺は一言も言ってないだろう？　それなのに夢中で舌動かして、それで俺のせいなんて、よく言えたよな？　呆れるよ、本当に」
薫のつたない舌使いに合わせ、口から自然と美姉をなじる台詞が飛び出してくる。
尊敬し、愛する姉にこんなことを言ってはいけないと理性が訴えるが、全身を痺れさせる快感がそれを押し潰し、ますます加速していく。
「気に入ったなら、もっと深く咥えてくれよ。ほら……根元までしっかりさ！」
興奮に声を震わせながら、さらに腰を突き出していく。
唾液塗れになった竿肌と窄められた薫の唇が擦れ、熱い快感を生み出す。
絡みついた舌を振り払うように奥へ進んだ肉槍の先端は、あっという間に喉奥の一番深い場所に衝突した。
「むぐぅ！　んごっ、げほげほっ、くぅっ、ああっ」
咽頭を突かれた反射で、薫がたまらず激しくむせ始めた。
苦しげに眉間に皺を寄せ、瞳には大粒の涙が浮かぶ。
「あっ……」
そんな薫の姿を見て、聖哉は『やりすぎた』とすぐ我に返った。
早く抜かなければいけないと、すぐ腰を引こうとした――が。
「むぐっ、んぷぅっ……おぇ……げほっ、げほっ！　くっ、あぁっ、喉……お、奥まで聖

哉の臭い……擦りつけられて……蹂躙されるっ、くぅっ、はぁむっ……んんん!!」
美姉は竿の根元を噛み締めるかのように唇をきつく閉じ、何度も咳き込みながら、それでも喉奥の粘膜を執拗に亀頭に擦りつけてきた。
濡れた熱い粘膜に亀頭全体が磨き上げられ、とてもではないがじっとしてはいられないくらい強烈なくすぐったさと悦楽が走る。
「くぁっ、ちょ……ちょっと待てよ、薫姉！　なんで、そこまで……」
「わ、わからない……でもっ、これが……いいっ。私は……んちゅっ、はぁ、聖哉に蹂躙されて……げほっ、気持ちが高揚……して……んちゅっ、はぁはぁっ！」
薫自身もその異様な昂りに困惑しているのが、落ち着きなく左右へ泳ぐ目線に表れていた。
その間も首を前後左右に振り、滲み出るカウパー腺液を自らの喉全体へ塗り伸ばすような動きを止めようとしない。
「薫姉……俺……っ……」
自分にとっては幼いころからずっと最強の存在であり、憧れ、愛していた完璧な姉。
そんな人間が、苦しげにむせながらも自らの怒張を貪り咥え、高まっている。
そのことに、聖哉は禁忌を犯しているのだという罪悪感などすべて吹き飛び、自分でも不思議なくらいの嗜虐的な欲望に支配されていく。

（確か、あの本ではこんな風に……掴んで……）
先ほど、ＳＭ雑誌を眺めながらついつい妄想していたこと。
それをすべて実現させたい。聖哉はその思いを止められず、半ば無意識のうちに姉の頭を両手で鷲掴みにし――。
「むぅっ、んふっ、はぁ、せ、聖哉……？　んごっ⁉　むぐっ、んむっ、おおっ！」
わずかに汗で濡れてしっとりとした髪の感触を指先で楽しみつつ、力任せに前後へ振り始めた。
不意打ちの動きに薫は抵抗できず、ただ苦しげな呻きを唇の隙間から漏らすだけだ。
「これ……イラマチオっていうんだ、確か。こうして、乱暴に……ううっ！」
さっきの雑誌で得たばかりの知識を呟きつつ、本能の赴くまま、姉の口内を貪るようにひたすら掴んだ頭を動かし続ける。
「まぁ、まっひぇぇ……聖哉……んごぉっ！　ちゅっ、んぶっ、おおぉっ‼　こりぇ、息が……んぐっ、むごぉぉ……おぇっ、ふぁっ、あふぁうっ、ううううっ‼」
乱暴な動きに驚いているのか、閉じた唇が小刻みに痙攣していた。
それが竿肌に絶妙な刺激を与えてくれ、今までに味わったことがない不思議な摩擦の快感を味わえる。
もっともっと、より激しく。

貪欲な欲情がふくらむ一方で、聖哉は最早姉を気遣うことなどすっかり忘れ、夢中でその乱暴な口淫を楽しむ。

（薫姉も、凄い顔してる……）

「むぐっ、んむっ、くはっ、おぐうううっ！　喉っ……つ、突かれひぇぇ……あぐっ、おおおおっ！　こぉっ、こんなっ、んぐっ、わらひぃ……がぁっ、あふううっ!!」

掴んだ頭を引き寄せ、喉奥を抉るような勢いで亀頭を叩きつける。

そのたびに薫は背筋を仰け反らせ、唇の隙間から呂律の回らない甘声を漏らした。

少し苦しげに歪んだままの表情だが、頬を染める朱色はより濃くなっている。

下からむわぁと立ちのぼってきているのは、妙に甘ったるい香り。

その発生源――美姉の股間に視線を向けると、袴のふともも辺りがわずかに湿っているように見えた。

「薫姉、もしかして濡らしてるのか？　弟に、こんな風に無理矢理口へチンポ突っ込まれてさぁっ！　口をオナホみたいに使われて、それでオマ〇コ濡らしてるのかよ!!」

すっかり火がついてしまった聖哉は、ためらいなく乱暴で淫らな単語を混ぜて悶える美姉を責めた。

ほんの少し前までは考えられなかった自分自身の変化に内心戸惑うが、それ以上に薫の見せる痴態が少年の気持ちを暴走させる。

「んふっ、はぁ、そんなっ……私はぁっ、ちがぁ……んくぅっ、どうして、こんなことで……んぐっ、身体、感じてぇっ、もうっ、ひふぁっ、んむっ、ちゅううっ！」

脱力し、聖哉にされるがまま口を使われている薫が、恍惚と呟き漏らす。

乱暴に扱われ、より快感が高まってきているのだろう、落ち着きなくふとももをすり合せているのが、袴越しにもはっきりとわかった。

そこから漂う甘い蜜臭も濃くなり、間違いなく悦んでくれている。

そのことが少年の免罪符となり、頭を掴む手に自然と力が篭もり、姉の口を射精するための道具として、ただひたすら乱暴に味わっていく。

「んちゅっ、じゅるっ、ちゅうぅぅっ、んむうううう！　くぁっ、ああっ!!　せぇ、聖哉の……臭いっ、濃くなって……こんなっ、私はっ、もぉっ、んふうっ、おおおっ♪」

姉の声が嬉しそうに跳ね上がり、舌が媚びるように竿肌を舐め続ける。

短い間隔で亀頭がぶつかる喉粘膜も熱く震え、そんなすべての刺激が聖哉を耐えがたい強烈な絶頂へ導いていく。

「くっ、ああっ、で、出る……薫姉っ、出るっ!!」

背筋を駆け上ってきた射精衝動で意識が飛び、頭の中が白く染まる。

そのタイミングで掴んだ頭を引き寄せると同時に腰を突き出し、喉にがっちりとペニスをはめるようにして欲望を解放していく。

「くぅぅ、あぁっ……こ、これ……本当に身動きが……んんんっ！」
「しっかり立っていろよ、薫姉。バランス崩すと大変だぜ」
道場のほぼ中央付近。
目前の美姉へ、聖哉は早くも興奮に声を上擦らせながら命じる。
袴とショーツを脱ぎ、下腹部をさらけ出した薫は、天井の梁から伸びる荒縄で、上げた両腕の手首を縛り付けられていた。
同じく梁から伸びる別の縄で右足のふとももを縛られ、膝を曲げた状態で強引に上げさせられている。
大きく股を広げた片足立ちの状態。剥き出しの秘所が、すでに透明の愛蜜を溢れさせているのがはっきりと見えた。
（やばい……まだ見てるだけなのに、凄くドキドキする……）
姉が差し出した切り抜きは、女性がこんな風に荒縄で拘束された写真。
緊縛――SMプレイの基本とも言えるそれに、聖哉も大きな興味を持っていた。
いきなり複雑なものは難しいだろうと、写真を参考にシンプルなものを試したが、縄で卑猥なポーズを強制される美姉の姿は期待以上に魅力的だった。
それは薫も同じなのだろう、聖哉が熱っぽい眼差しで眺めているだけで、秘裂から溢れる蜜の量が増すばかり。

ふとももを伝って垂れるそれが床に少しずつ水溜まりを作っていき、立ちのぼる甘酸っぱい独特の香りが、神聖な道場を昨夜同様淫らな雰囲気へ変えていく。
「んふぅっ、はぁ、ああっ、み、見られている。聖哉に……こんな浅ましい、惨めな姿を……っ……ダメだ、見ないでくれ！　こんなところを見られたら、私はもう、本当に戻れなくなるっ……はぁっ……ふぁあ……♪」
今になって羞恥が強まってきたのか、薫は必死に訴えながら、拘束を解き放とうと激しく身じろぎを始めた。
だが、決してほどけないようにと、聖哉が力いっぱい縛った荒縄は、少し暴れた程度でどうにかなるものではなかった。
動けば動くほど、新雪のように透き通る白肌に深々と食い込んでいく。
縄目がくっきりと刻み込まれ、充血してきて少しずつ赤く染まる。
その上を割れ目から滴り溢れる愛蜜が流れていく光景は、見つめる少年の理性を吹き飛ばすには、十分すぎる過激さだった。
「ダメだよ。だって、これは薫姉へのお仕置きなんだぜ？　むしろ、そうやって嫌がってくれるほうがいいかな」
「はぁ、んぅっ、お、お仕置き……そうだ、この恥辱は……私に相応しい罰だ。神聖な道場を、二晩連続で汚すような真似をしている、浅ましい私に……あぁっ……♪」

聖哉の言葉を反芻し、自ら貶めるように呟く美姉は、それだけで高まってきたのか今度は物欲しげに尻房を振り始めた。

剥き出しの桃のようなヒップが悩ましく揺れ、秘裂から溢れる蜜液が飛び散る。

ついさっきまで稽古中の勇ましい姿を見ていただけに、目前で淫らに嗜虐を求めてくる美女が同一人物と思えない。

その極端すぎるギャップが、聖哉の興奮を煽ってくれる。

（ほ、本当にやっていいのか……でもっ、俺も我慢できないっ！）

ＳＭ雑誌を見たとき、真っ先に目に留まり、興味を持った行為。

姉と自分に置き換えて妄想していたそれを実際にできるのだと思うと、それだけで倒れてしまいそうなくらいの昂りに襲われる。

聖哉はカラカラに乾いた唇を舐めて逸る気持ちを抑えつつ、右手をゆっくりと上げ――

次の瞬間、勢いよく振り下ろした。

パチィィィンッ！

「ひぐぅっ、ひぃぃっ、あああああああっ!!」

肌を打つ乾いた音と美姉の甲高い悲鳴が、道場に響き渡る。

火照り、ほのかに色づいていた尻肌に、叩かれた跡が赤く浮かび上がってきた。

（大丈夫、だよな……？）

かなり本気で叩いてしまった聖哉は、一度手を止めて薫の様子をうかがう。
彼女のような性癖の人間にとって、この苦痛はそのまま悦楽にすり替わってしまうものだと雑誌では見たが、それが本当かどうかまだ確信を持てない。
「はぁ、んふっ、せ、聖哉……はぁっ、ああ……」
しかし、吊り上げられた身体を弱々しく震わせて振り返る美姉の表情は、少し苦しげに歪みながらも驚くほど紅潮していた。
吐息は甘ったるく切れ、そこに溶け込んだ快楽がはっきりと嗅ぎ取れた。
「どうして、尻叩かれてそんな顔になるんだよ。薫姉って、本当に……っ！」
その顔を見ていると背筋がゾクゾクとする昂りを止められず、聖哉は息つく間もなく何度もスパンキングを続けていく。
パンッ、パチンッ、パチィィンッ！
「んひぃぃぃっ、ひぃっ、がぁ……あああっ！　すっ、すまないっ、こんなっ、おひり、叩かれて……はへぇっ、ふぁっ、あんんぅっ、くふぁああっ♪」
手のひらが痛くなるくらいの強さで叩くたびに、美姉の嬌声が大きくなっていく。
謝罪の言葉とともに赤く腫れてきたヒップが揺れ、ふとももを濡らす蜜液の量が目に見えてわかるほど増えている。
濃密に漂う甘く淫らな香りが少年の理性を蕩けさせ、美姉をいたぶる手の動きを一時も

止めることができず、夢中で叩き続けた。
「はぁ、はぁ……どう？　まだ足りない？」
聖哉は息が切れ、手のひらがジンジン痛みだしたところでようやく動きを止め、息絶え絶えの薫に問いかける。
吊り上げられた脚をビクビクと痙攣させる女剣士は、もう軽く達したかのような恍惚の表情になっていた。
額にはじっとりと汗が浮かび、妖しく潤んだ瞳はなぜか壁のほうへ向けられている。
「まだだ、こんな浅ましい私には……もっと、もっときつい罰が……」
なにかを求めるように呟く薫が見ているのは、壁にかけられている竹刀。
そう気づいた聖哉は、そこまで求めるのかという驚きと、そこまでしていいのかという歓喜の思いに身震いしつつ、すぐさま自分の竹刀を手に取った。
「そうだな。道場でこんなにいやらしくオマ〇コ濡らす薫姉には、これくらいきっつい罰じゃないと足りないか。……そうだよな？」
聖哉は自分で驚くほど冷たい声であざ笑いつつ、今度は竹刀ですでに腫れぼったくなっている尻肌を叩きまくる。
バチィッ！　バチンッ!!　バチィッ！
「はぐううっ!?　んぉっ、おおおっ！　おひりっ、やっ、焼けりゅっ、んぎぃっ、ひい

いいいっ、ふぁっ、ふぁひいいいいっ!!」
全体が赤みを帯びていた肌に、竹刀の形の細く真っ直ぐな痕が上書きされていく。
そのたびに薫は縄を結んでいる梁が軋むほど暴れ、苦痛と悦楽で歪み蕩けた表情で狂おしい悲鳴を上げた。
「……これでも気持ちいいんだ」
さすがにここまでいくとやり過ぎではないかと一抹の不安を覚えていた少年だが、悶え狂う姉を見て余計な気遣いだったと思い直した。
再び竹刀を振り上げ、さっきは多少セーブがかかっていた力を解放し、かなり強く、繰り返し叩いていく。
「んんんんっ!! それぇっ、イッ……イィッ、ひはっ、はぁ、んぎぃっ、くううっ、ああぁっ、どうしてぇ……お尻っ、痛くされて、もうっ、はへぇっ、ふぁっ、あああっ」
叩くたびに嬌声が跳ね上がり、じゅわっと音が聞こえそうな量の蜜汁が膣口から溢れて滴り落ちる。
始める前は白く滑らかで美しかった尻肌が、まるで編み目を描くような赤い痕で汚されていくのを見ていると、聖哉も気が遠のきそうな喜びを味わえた。
(俺も、やばい……ここまで興奮するとか……)
確実に引き返せないところまできてしまっている。

そう思っても、もう美姉を責める手を止められない。
「どうだよ、薫姉！　そろそろ――「反省できただろうっ‼」
目眩がするような昂りを噛み締めつつ、聖哉は一際強く竹刀を打ち下ろす。
バチィィィィッ！
「ひぃぃぃっ、んくぅっ、はぁ、ひぉぉっ、おおおおっ‼　おひりぃっ、ひぃ、響くの……イッ……んぐっ、おっほぉっ、んぉおおおおっ♪」
尻肉、そして道着に押し込まれている双乳までもが揺れるほどの衝撃に合わせて、薫の甘声が道場全体に響き渡った。
蜜裂からは透明の飛沫が迸り、床にできていた小さな液だまりを一回り大きくする。
「もしかして……イッちゃったの？　叩かれただけで」
想像していた以上に激しく乱れた姉を見て、聖哉は少し驚きつつ問いかけた。
「わ、私は……こんなっ、んふっ、はぁ……ああっ」
「隠しても無駄だって。……ほら、なんだよ、このオマ〇コ！」
恍惚と蕩けながらも恥じらいを見せる薫の姿に、聖哉もまた理性が焼き切れ、厳しく問い詰めながら竹刀の先を秘所に向けた。
割れ目を軽くなぞってやると、それだけでグチュグチュと濡れ蕩けた肉ビラが卑猥な水音を奏でる。

「聖哉っ、そこっ、んふぅっ、ああ！　今、いじられるとぉっ、ふぁああっ♪」
ぐったりしていた薫は、その刺激でまた背筋を淫らにくねらせ始めた。
竹刀で責められる割れ目も休みなくヒクつき、漏れる蜜液の量がまた増える。
「私は、もう……ダメだ。こんなっ、んぅっ、お尻、叩かれてイクなんて……」
「そうだな。薫姉、筋金入りのマゾだ……マゾ豚だよ！」
聖哉は昂りに背を押されるまま、空いた片手で薫の道着の胸元をはだけさせた。
こぼれ落ちた爆乳がぷるんっと扇情的に揺れるのを眺めつつ、手早く自らの怒張を取り出し、それを竹刀の代わりに蜜裂へあてがう。
「ふぁうっ、あぁっ、マゾ豚っ、わ、私は……はぁ、ああっ」
「そうだよ。マゾ豚な薫姉は、叩かれるだけじゃ物足りないよな？　今度はこれで……オマ〇コの中までお仕置きしてやるよ！」
軽く上体を前のめりにさせ、自分のほうへ突き出させるようにした尻房。
その谷間の割れ目は、亀頭を押し当てただけで、それを中まで飲み込みたいと言わんばかりにヒクヒク蠢く。
敏感な先っぽを舐めしゃぶられるような動きに早くも甘美な痺れを感じながら、聖哉は一気に腰を突き出していった。
ズップゥッ、ズリュウウウウッ！　ズブリュッ、ズブブッ!!

ためらいがちに呟く薫は、自ら道着に手をかけて胸元をはだけさせた。
稽古後、シャワーも浴びずに来ただけに、白肌は汗ばんでほのかに色づき、いつも以上の色気を醸し出している。
そして豊かな双丘を絞り出すように囲んでいるのは、無骨な荒縄だ。
複数の六角形が形取られる結び方のそれは、いわゆる『亀甲縛り』と呼ばれるもの。
生徒会室から持ち出した雑誌で学んだ、緊縛の基本とも言えるものだった。
（改めて見ると……凄くエッチだよな、これ）
今朝、雑誌を片手に不慣れながらも自らが施した拘束は、完成を確かめるために眺めたとき以上の昂りを与えてくれた。
肌が汗ばんで淡く色づき、縄がより深く食い込んでいるからだろうか。
見つめているだけで鼓動が跳ね上がり、理性が崩れていくのを実感できた。
「どうだろうか？　んっ……縄が擦れて、少し赤くなってしまっている」
そんな弟を煽るように、美姉が乳房の下側を通る縄をわずかにずらす。
身動きに合わせてもっとも揺れる場所だけあって、そこには縄痕はすでにくっきりと刻み込まれている。
白肌に浮かぶ赤が不思議な色気を醸し出し、少年の加虐心を燃え上がらせた。
「そこだけじゃわからないな。……ちゃんと、全部見せてくれよ」

「こ、ここで……か？」
「外でやってみたいって言ったのは、薫姉のほうだよ？　ほら、早く」
「確かに言ったが、その、まさか学園の中のこんな場所とは思わず……わ、わかった」
スイッチが入った弟に冷たい眼差しで命じられた薫は、羞恥と昂りに頬をより濃い赤に染めつつ、ぎこちない手つきで道着と袴を脱ぎ捨てていく。
縄は胸元だけではなくお腹、そしてふとももの付け根もしっかりと拘束していた。
左右を通る縄で強調されている割れ目は、早くも透明の蜜を滴らせている。
綻ぶ肉唇から覗き見える肉ビラが、刺激を求めるように小さく震え蠢く。
それを見つめていると、聖哉は先ほどまで感じていた葛藤もどこかへ吹き飛び、目の前で昂る美姉――愛しい性奴隷を嬲りたいという衝動に染め上げられていった。
「それで、どうして欲しいんだよ？　こんな場所で脱いでさ。みんな、中でまだまだ稽古中だよ？　それなのに……」
「んぅっ、そ、それは……あの……」
自分でも不思議なくらいの冷たい声でなじる聖哉の前で、薫は言葉少なにうつむき、ただ物欲しそうに身をよじらせる。
動きに合わせて身体を縛る縄がわずかにずれ、チラチラと見える赤い痕が加虐の悦びを一層煽ってくれた。

「……して、欲しい。ここで……わ、私を……いつものように……」
「もっとはっきり言わないとしてもらえないって、わかるだろう、もう？　一ヶ月も毎日してあげてるんだからさ。……ほら、言えよ。もう立っていられないみたいだし、そこの壁にもたれかかっていいからさ……な？」
力なく震える美姉の腕を掴み、そのまま道場の壁際に立たせる。
すぐさま彼女の頭の横の壁に手を突き、上からじっと見下ろす。
いわゆる『壁ドン』の姿勢は、ご主人様として牝奴隷を威圧するときにも有効だ。
この数日それに気づき、美姉を追い込むときに利用している。
「ああ、あの……し、して……学園にいやらしい縄化粧姿できて……そんな格好で稽古にも参加して、密かにオマ〇コを濡らしていたマゾ奴隷を……ここで犯してくれ」
具体的に求めてくる言葉に合わせて瞳が濡れ蕩け、唇から熱い吐息がこぼれた。
壁に預けた背すじが悩ましく痙攣し、その屈辱と羞恥の感情だけで軽く達したのだと、見下ろす少年に教えてくれる。
「本当に恥ずかしい女になっちゃったよな、薫姉。ついさっき、この中でみんなからあれだけ声援を送られて、尊敬されていたのに……なんだよ、これ！」
そんなマゾ姉に、より深い羞恥を与えようと、聖哉はわざとらしくため息をつきつつ、空いている片手を彼女の秘所へ伸ばしていった。

クチィッ……クチュッ……チュッ……。
「ひうううっ、んんっ！　そこっ、ひぅっ、ふぁあっ⁉」
すでに愛撫を待ちわびるように綻んでいた割れ目を指先でなぞると、卑猥な水音と薫の甘い嬌声が響き渡った。
物欲しげにヒクつく肉唇を人差し指と薬指で広げ、中指で淫液を溢れさせている穴口を軽く突くと、美姉は狂おしげに背すじをくねらせ始める。
「聖哉、そこっ、ひぅっ、はぁ、あんんっ……んんっ、ああっ」
「あまり喘ぎすぎると、中に聞こえるかもしれないぜ？」
「あ、ああ、わかっている……けどっ、こんな……刺激……ひぅうっ」
聖哉の注意にすぐうなずき返してきた薫だが、震える唇を必死に閉じようとしても、こみ上げてくる甘声をすべて飲み込むことはできないようだ。
肩を震わせ、縄で絞り出された乳房も卑猥に揺れる。
そんなマゾ姉の哀れで艶めかしい姿が、少年の興奮の火に油を注いでいく。
「指でこれじゃ、チンポ入れたらぜったいに我慢できないよな？　見つかったらまずいんだし、やめておいたほうがいいかな」
「そ、そんな……んっ、大丈夫だ。声は抑えられる。だから……ひぅっ、あぁっ、今朝、こうして縛られたときからずっと、身体が疼いている……我慢できないんだ。だからっ、

ひううっ……入れて……聖哉のオチンポっ、オマ〇コに……くふぁあっ！　学園の中で、道場の裏で、聖哉のオチンポで貫いて欲しい……んぅっ、ああっ、わ、私は最低だ。こんなおねだりを……でも、もうっ、もうぅ……！」

声を押し殺し、もう耐えられないと一気に吐き出す淫らな美姉。

穴口は聖哉の中指を噛み締めるように締まり、内壁は早く最奥まで飲み込みたいと言わんばかりに奥へ向かってうねっているのが感触でわかった。

「本当に限界みたいだな、薫姉。でも、俺だって……もう限界だ！」

ついさっき自分を一撃で倒した女剣士が、こんなにも無様に求めてきている。

胸の奥に暗い情欲の炎が灯り、背すじがゾクゾク震えるほどの耐えがたい悦びがこみ上げてくるのを、少年も抑えきれない。

すでに限界まで勃起した赤黒い肉槍を取り出すと、その先端を指で押し広げた穴口に押しつけ――そのまま腰を突き出す。

ズリュウウウウウウッ、ズボォォッ、ズボボボッ！

「んくうううっ、はへぇっ、あっ、ひうううっ！　オチンポぉっ、きぃっ、んんっ、くふぁああっ♪」

朝、緊縛されたときから発情していたという膣内は、あっさり怒張を飲み込んでいく。

肉壁が大きく波打って幹胴に絡みつき、亀頭が行き止まりの壁を打つと、まるでそこが

スイッチになっていたかのごとく全体がきつく収縮する。
肉幹が一回り小さくなるくらいの圧迫感に聖哉が思わず腰を震わせている間に、膣壺を埋めてもらえた美姉は淫らな喘ぎを漏らし続けていた。
「ひぅっ、んんんっ!! な、中でビクビクと震えて……くふぁっ、あっ……私、本当にこんな場所で聖哉に貫かれているっ……学園でぇ、外で……んくぅうっ♪」
薫は潤んだ瞳で周囲を見渡し、野外で突き犯されていることを実感しながら悶える。
嬌声で言葉が途切れるのに合わせて膣壁がうねり、蜜液が溢れ出てきた。
「薫姉、もっと声抑えないとまずいぜ。聞こえるって」
立ちのぼる甘い淫臭に酔いしれながら、聖哉が注意した——直後。
『そう言えば、内藤先輩どこだろう?』
『さっき休憩行くって言ってたよ』
道場の中から、女子部員たちの話し声が聞こえてきた。
「んぅっ、ううぅっ……!」
薫は慌てて自らの右手で口を塞ぎ、少しでも身を隠そうと言わんばかりに肩をすくめて動きを止める。
「気をつけないと。話題にされてるときに声が聞こえたら、興味もたれるぜ?」
聖哉は姉の不安を煽るように声をかけつつ、めざとく周囲を確認する。

幸い、すぐ覗かれるような窓は近くに見当たらない。
誰かが近づいてくる気配にさえ注意すれば、露呈する心配はないだろう。
（なら……いいよな、我慢しなくても）
そう判断するや否や、聖哉はまずはゆっくりと腰を振り動かす。
ニチュッ……クチュリッ、チュプッ……。
雁首で肉壁のヒダを一本ずつ弾く感触を確かめるように、今までにないくらいの遅さで怒張を往復させていく。
「聖哉、今、動かれたら、私はぁ……はんっ、うぅっ、ひぅっ、くうっ♪」
そんな焦らすような刺激でも、卑猥な緊縛姿を学園内で晒すことに興奮を覚えているマゾ姉には、耐えがたいものらしい。
壁に預けた背すじをもどかしげにくねらせ、艶やかに濡れた唇の隙間から押し殺せない甘ったるい嬌声を漏らす。
ちょうどこの壁のすぐ向こうに部員たちが固まっているらしく、さっきからずっと話し声が聞こえてくるのが、彼女の快感神経をより過敏にしているようだ。
（バレそうなのに、それで興奮してるんだな……薫姉）
ついさっき、勇ましく自分を打ち倒した女剣士だとは思えない姿。
改めて彼女の業深い性癖を見せつけられ、それが少年の情欲に火をつける。

試合後、自己嫌悪に陥ったこともどこかへ吹き飛んだ。
自分に貫かれて喘ぎ喜ぶ美姉を楽しませること以外、頭の中から消えていく。
ズチュッ、ヌチュルッ、ズップッ……。
自然と腰使いも少しずつ早くなり、幹胴の出入りに合わせて卑猥に捲れる穴口から漏れる水音が、はっきりと聞こえる大きさで辺りに響き渡る。
「はぁっ、あくっ、んぅっ、はぁ、くふぁっ、あぁっ……」
濡れ蠢く膣粘膜を擦り上げて行き止まりを突くたびに、薫は荒縄で絞り出された乳丘を揺らしながら、我慢できずに熱く喘ぐ。
全身が熱く火照っていると、淡く色づき始めた肌が教えてくれる。
「凄くエッチな声だな、薫姉。稽古のときと大違いだ。みんながその声聞いても、薫姉だとはわからないんじゃないか？」
「はぁはぁ、そ、そんなことぉ……はぁ、ひぅっ……ああっ」
壁の向こうを意識させればされるほど、美姉は切なげに表情を歪めて身悶えた。
『内藤先輩に、聞きたいことあったんだけど……まだ戻ってこないね』
『遅いよね。どうしたんだろう？』
まるでタイミングを計ったかのように、壁の向こうから聞こえてくる話し声の内容が姉についてのものになっている。

「聖哉、ほ、本当に止めてくれ。聞かれるっ、後輩たちに聞かれたら……あぁっ」
「どうなるだろうね？　稽古サボって、道場の裏で弟のチンポで喘いでいるところバレたら……ずっとこんないやらしい縄化粧されてたってバレたら」
聖哉は薫の耳元に顔を近づけ、改めて意識させようと囁く。
同時に抽送に力を込め、一突きずつ、思い切り子宮を押し潰すような動きに変えた。
「くふぁああっ、はぁ、んくうっ！　聖哉、そ、その動きっ、ダメ……子宮、いじめるのはぁ……はぁっ、ふぁううっ、ひぐぅっ、くうっ、ひいいいっ‼」
ズンッと一定のリズムで強い衝撃に襲われるたび、薫の甘声が跳ね上がる。
壁が軋んでしまうのではないかと心配になるくらい思い切りもたれかかり、膝を力なくガクガクと震わせていた。
「倒れるなよ、薫姉。我慢しないと、抜いちゃうぜ？　俺が支えてやるからさ」
そんな弱々しい姿に加虐心をそそられた少年は、そう告げながら胸を絞り出している上側の荒縄を両手で摘まみ、乱暴に引っ張り上げた。
「ひいいいいっ、いいっ、あぁっ……！　肌、食い込んで、擦れて……くひぃっ♪」
縄ごと双丘が持ち上げられ、柔らかな乳房にグイグイと食い込む。
ずれたところに見える赤い縄痕と汗ばむ白肌のコントラストは、何度見てもたまらなく淫靡で魅力的だ。

「やっぱり大きいよな、薫姉のおっぱい。ゆっさゆっさ揺れてさ」
そこに興味を惹かれた聖哉は、何度も荒縄を引っ張ってふくらみを弄ぶ。
「やめっ、てっ、んぁあっ！　聖哉、もう、本当に声がっ、出てっ、ああっ」
ボールのように弾み揺れる乳房の動きに合わせ、薫が途切れ途切れに喘ぐ。
膣内を突き混ぜられる刺激に加えての責めに、もう声を抑える余裕もないようだ。
『今、内藤先輩の声聞こえなかった？　ちょっと怒ってるみたいな』
『そう言えば、弟くんもいないよね。もしかして……どこかでお説教中とか？』
『ああ……よく怒られてるよね。彼も結構頑張ってるのに』
道場内にも多少は声が聞こえたらしく、女子部員たちの話題が変わった。
『内藤先輩、私たちには優しいのにね』
『身内に厳しいタイプなんじゃない？　弟くんも大変だよねぇ』
聖哉を気の毒がる内容に、自然と苦笑を浮かべてしまう。
「実際は逆なんだけどな？　俺がこうして……思いっきりいじめててさっ」
そう言うなり、少年は縄から手を離して乳房を鷲掴みにする。
火照るふくらみに指を深々と食い込ませ、手のひら全体で捏ねるように揉む。
「ひぃっ、ああっ、胸……いっ、一緒にされるとっ、んくっ、うぅっ」
お椀型のふくらみが乱暴に潰されていく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/